

# 林心耳さんの屏風絵等 四十七点の作品奉納

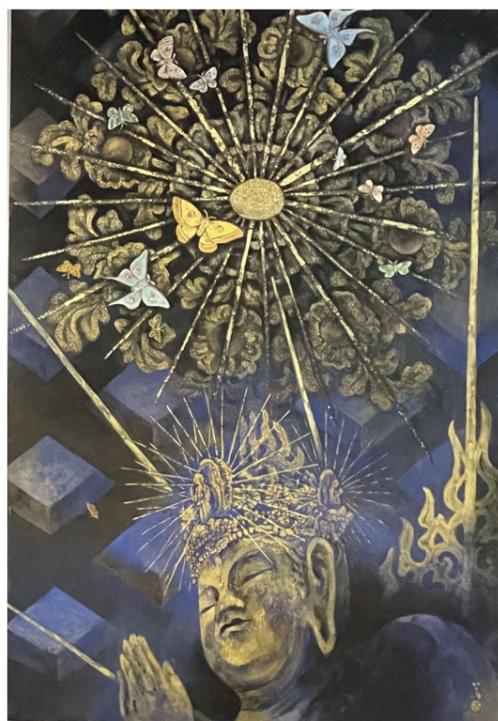
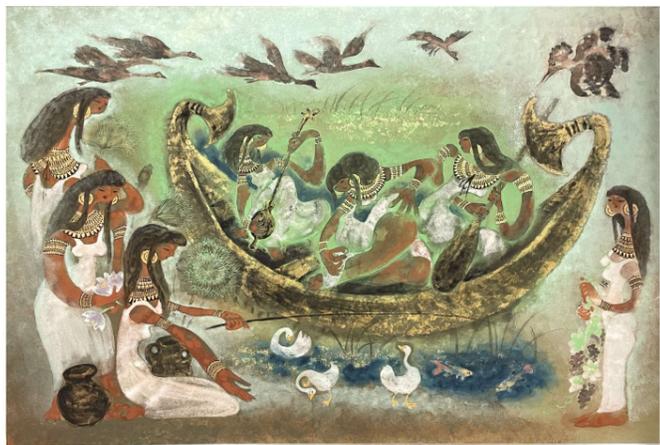
羽村市宗禅寺高井正俊和尚様から、林心耳はやしんじさんの屏風絵の開催と、林心耳さんのご子息である慶応大学名誉教授（仏教絵画史・日本美術史専門）林温様が、屏風絵・日本画等の作品所蔵を希望するお寺に、寄贈される意向がある旨のご案内を頂きました。絵画の作者林心耳さんは三歳にて聴覚を失いながらも、画壇とは交わりを持たずに五日市にて活動を続け、「古代」・「仏教」・「自然」という三つのテーマを軸に創作を続けた孤高の画家として認知されている芸術家です。二月十一日の絵画展初日に伺い、高木和尚様と林先生のご案内で拝観し気に入った作品をお伝えしたところ、その全ての作品四十七点を奉納していただきました。

**事前に頂いた『故 林心耳さん回顧録』林心耳回顧展より、『冒頭（ご挨拶）父・林心耳展覧会開催に寄せて』の林温先生挨拶文を引用紹介させて頂きます。**

「父は大正八年に生まれ、三歳の時に聴覚を失いました。耳が聞こえぬ幼児が上手に絵を描くことに気づいた祖父が試みに絵を習わせたところから、父の終生の画業が始まったと聞きます。川端龍子の弟子・坂口一草に弟子入りして、龍子の青龍社に属し、龍子没後は日展で活動し始めていた高山辰雄の門を叩きました。高山辰雄の指導を受けつつ、日展に何度か出品しましたが、言語不通の困難や画界の政治的駆け引きに馴染めず、更に生活にも追われ煩悶の末、画業を捨てる決



上写真 『狩りと雲』  
下写真 『水嬉夢』1982年 第7回個展



『天蓋（三月堂内陣）』第11回個展

意をし諸職を経ました。五日市（現あきる野市）に居を定めた生活は心労が多く、徳雲院（あきる野市・臨済宗建長寺派）の加藤耕山老師の許へ朝座禅に通ったりしました。詮ずるところ、父にとって絵を描くことは生きることにならず、画壇と絶縁しつつも絵を続ける日々は七十六歳に命終わるまで変わることはありませんでした。

省みるに父の絵画は自然・古代・仏教の三つのテーマを持っていたようです。俗塵にまみれた画界や都会を嫌い、秋川溪谷に居を移した父が古代を憧憬したのは豊かな自然に包まれ、純粹素朴に生きた古代人の心性に強く共感し、夢見たからでしょう。縄文土器や埴輪に魅せられる一方、エジプトやインドに足を運んで熱心に観察したのは、古代の遺跡と庶民の生活でした。父にとってホトケは難しい仏教の教理とは離れて自然や古代人の中に息づく慈愛のようなものだったと思えます。あれほど人間社会に傷つき不正を憎んでいたのに、父の絵には全く批判など否定的な影がなく、むしろ画面は明るく愛と喜びに満ちています。元来人間好きだった父は、言語によるコミュニケーションの機会を与えられなかったために、ひたすら絵を描く事によって人びとに真摯に語りかけ続けたのであり、それは神仏に祈りを捧げる行為にも似たものであったと思えるのです。

『心耳』という画号は川端龍子が聴覚を失った画学生を見て命名したものです。父の絵を見て『心耳』と聞くと『心』ではなく『心を聞く』というように思えてきます。『心』とあり、林心耳さんの作品には林先生の解説のとおり、ホトケの慈悲を大**自然・古代にまで広げた精神世界を感じる**ことが

「お檀家の洋画家望月一雄氏」  
（日本美術家連盟会員）  
「日本画家林心耳画伯を読み解く」



でき、感銘を受けました。大勢の方に鑑賞して頂けるよう、宝清寺たちばな会館に「常設展」として、四十七点飾らせて頂きましたので、ご法事や墓参の折など、是非、ご鑑賞下さい。

四回程、林心耳様の日本画を見せて頂く事が出来、同じ絵描きとして大変興味深く、読み解いてみたいと思ひ書かせて頂きました。林心耳様の年譜・作品資料・俳句等を読み、更に、林温様、ご息女のお話しもお聞き出来ました。額装された屏風絵、日本画三十九点を拝見しますと伝統的な日本画の題材である風光明媚な四季の風景ではない事がわかります。まず、エジプト、インドの風土の中に生きる日常の庶民生活に視点を置き、風習、宗教、天体現象（日食）などの作品、仏教建築を通しての思いの作品。土器類、埴を通しての憧れの作品。晩年は身近な無邪気な童女の姿の作品など多様で、同じような作品はない。これらの作品は、暖かな庶民の目線で見え、形、構図、動きなど創造力、着眼点もみな独自の表現で調和しており描写力が凄く感動しながら本質を捉え自由奔放にその時々を表現されており、描いている喜びが画面から溢れ出ています。金や金泥が多く使用されているのも特徴です。ご不自由であった音を画面の中に多く表現されています。その事は二十二句の俳句にも書かれ、深い洞察力を感じました。空や背景は表情空間だけでなく、天上天下の宇宙感を描写しているようです。自然、仏教、古代の中に生きる人、あらゆる動植物、建築物、遺物への敬意、拝む心で描き込まれた作品群。見る人に共感を与え、画面との間に妙味が漂う感じがする。一貫して描く事を貫き通す、精神力と画力、まさに絵を描く事が人生そのものであったに違いありません。気になった作品が「狩りと雲」（上の写真）の六曲一隻の屏風絵だった。風雲急を告げるのごとし緊張していくドラマの画面構成。雲の動きが心耳様の心の写真かと。全作品は六十歳代が主で、二十歳から三十八歳まで青龍社展とその後、日展に出品された作品はここにはないが、五十六歳から毎年個展や回顧展を六十九歳まで開催され、その画力は想像を超える。エジプト、インドへの観察旅行も六十一歳から六十四歳までと異国の庶民の生活を胸に刻み、制作に撃つていった。是非、林心耳様の慈悲に満ちた心の写真を見て頂きたい。